

マーラーの『嘆きの歌』と日本の民話

「Symphony」 東京交響楽団 2013 年 3 月号, 21-23 頁 補足

渡辺美奈子

"Symphony" 読み物「マーラーの『嘆きの歌』と日本の民話」に掲載した馬琴の「石言遺響」の補足です。伝説に登場する隅高業右衛門（くまたかごううえもん）の息子で全盲の少年八五郎が命をかけて孝を尽くす悲話は、主となる月小夜（つきさや）の話に劣りません。この話は知られていないばかりか、馬琴による同名の（八五郎が登場しない）別の伝説が広く伝わっているため、補足することにしました。ここでは、不幸な全盲の少年八五郎とその尺八を主役に立て、官職に就いた者やその娘を脇役にします。つまり主役と脇役を入れ替え、八五郎とその尺八を中心とし、史実に絡む内容や、月小夜を取り巻く複雑な人間関係の詳述はできるだけ避けることにしました。参考としたテキストは、「佐夜の中 山石言遺響」鶴聲社（明治 17 年 [1884 年]）出版（国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で公開）です。現在通用している漢字やひらがな、アラビア数字に変えたところがあります。馬琴による前書きは「小夜中山復響石言遺響（さよのなかやまかたきうちせきげんいきょう）」で、執筆は文化元年、西暦 1804 年でした。登場人物の年齢は数え年になります。

まず、拙読み物「マーラーの『嘆きの歌』と日本の民話」 東京交響楽団 "Symphony" 2013 年 3 月号 23 ページから「石言遺響」に関わる部分を引用します。読点はコンマに変えます。業右衛門は「業右」と記しています。

曲亭主人（滝沢馬琴）の「小夜中山石言遺響」（1804 執筆）は鎌倉幕府滅亡期から始まり、業右は元北条高時の一族郎党である。業右の悪行を悲嘆した妻が病死し、幼子八五郎は泣き暮らすうち、遂に両眼が潰れてしまった。全盲の身で継母の虐待に堪えながら、尺八を吹いて自らの憂苦を慰め、15 才になった八五郎は、吹雪の夜、密かに家を出、追いはぎを業とする父の犠牲となる。奪い取った衣で過ちを知った業右は悔やみ、形見となった尺八で心を慰め、隠っていたが、妻に詰られ、再び追いはぎに出、小石姫（ここでは右少辨俊基の孫で、主人公月小夜の娘）という妊婦を殺害する。そこへ一人の法師が現れたため、業右は慌て、尺八を捨て置き、逃げてしまった。小石姫の傷口から生まれた 8 ヶ月の胎児は、この法師に救われる。小石姫の夫傳内は、遺体の傍に落ちていた血まみれの尺八

を拾い、妻の亡骸を葬り、墓標に圓石を置いた。これが夜泣き石である。傳内は尺八を手がかりに仇討ちに出た。一方の業右は形見の尺八を尋ね歩き、やがて聞き覚えのある音に惹かれ、姫から奪った観音像と交換しようとした。この遺品が証拠となり、傳内は決闘を申し出る。業右の一刀をその尺八で受け止め傳内は、元主君でもあった妻の仇を討ち果たした。

(中略)

当時ヨーロッパのメルヒェンと日本の民話が、互いに直接素材になるとは考えにくいだけに、マーラーの『嘆きの歌』と日本の民話に、共通するいくつかのモチーフが認められることは興味深い。音楽ではたとえば、「ああ楽師さん…」、「ああ兄さん…」の箇所、音の高さを次第に上げながら3度現れる印象的なフレーズにおいて、小節毎に変化する拍子や旋法等に、異国の民衆的要素が感じられる。骨で作られた笛を介した弟の嘆きと訴えて、本来は少年が歌うだけに、とりわけ「石言遺響」の八五郎の悲話が思い出されてならない。



ではこの流れに沿って、順に補足します。

著者曲亭主人について

『南総里見八犬伝』で知られる馬琴は、執筆の際に、いくつかの号を使用しており、この「石言遺響」の前書きには「曲亭主人」、『南総里見八犬伝』の「八犬士傳序」(文化11年甲戌1814年)には「蓑笠陳人」と記されています。本名は滝沢(瀧澤)興邦で、明和4年(1767年)生まれ、嘉永元年(1848年)没ですから、フランス革命前の時代にベートーヴェンより3年早く生まれ、三月革命の年に亡くなったということになります。

小夜中山(小夜の中山、佐夜の中山)

馬琴の伝説では小夜中山で、読み方は「さよのなかやま」です。現在は「小夜の中山」と綴りますが、「の」の多用を避けるため、ここでは馬琴と同様、小夜中山と綴ることにします。場所は現在静岡県掛川市、当時は遠江国の東部。金谷から菊川を通過して日坂への間に位置する峠です。「石言遺響」で、日坂は小夜の中山より西の坂という意味で「西

坂」，菊川は「菊河」と表記されていますが，ここでは，現代通用する日坂，菊川に変えます。

馬琴の「石言遺響」以前の小夜中山伝

馬琴の前書きによれば，小夜中山伝には凡そふたつあり，そのひとつは天平期，すなわち聖武天皇の御代で，拙読み物の 22 頁に載せた「狭夜中山敵討」（1775）がそのひとつに相当します。もうひとつは弘安つまり鎌倉時代ということです。資料によって官位こそ異なるものの，月小夜の父俊基が実在した日野俊基で，史実と伝説と創作が絡み合った小説のような感があります。

「石言遺響」の時代設定

馬琴は，これまでの伝に『太平記』の一部を重ね，次のような内容の文で話を始めました。正慶 2 年 5 月（西暦 1333 年），諸国の官軍一時に蜂起し，新田義貞の大軍既に鎌倉に攻め入りければ，同 22 日，北條相模入道高時東勝寺にて自殺し，平氏の一族悉くほろびうせて，後醍醐天皇隠岐国より還幸。光厳天皇が同年 5 月 25 日（西暦 1333 年 7 月 7 日）に退位して正慶は終わり，翌年建武と改元されました。伝説「石言遺響」は全 10 編で，業右衛門親子が登場するのは第 6 編からであり，尺八に関わる話は，後半の多くの部分を占めています。

隅高業右衛門について

業右衛門は，別伝「狭夜中山敵討」では轟業右衛門で，馬琴の伝説では隅高業右衛門です。読み物では，字数的な理由から姓を書くことを控えました。業右衛門は，北条高時の一族，相模守基時入道信忍の郎党の鶴見一學（つるみいっかく）という者で，平家滅亡の後に仕官しましたが，凶勇の剛者だったため，「隅高業右衛門」と改名して諸国を遍歴することとなりました。それからというもの，彼は落ち武者の鎧甲をはぎ取り，旅客を殺害してその旅費を奪い，ひたすら残暴を恣にしていました。

業右衛門の妻と息子八五郎について

業右衛門の妻は夫の悪行を憂い，病となって遂に他界します。伝説に業右衛門親子が登場する 3 年前のことです。息子八五郎は，父に似ず，生まれつき老実で孝心者でした。悲しみ泣き暮らすうち，遂に眼病を患い，とうとう両眼がつぶれてしまいました。盲目となって以来，八五郎は尺八を吹いて自らの憂苦を慰めてきたのでした。

業右衛門の再婚

業右衛門は、妻を亡くし、全盲の息子を抱えたこともあり、誰からも諫められることなく、思いのままにふるまっていたましたが、ある時、万字前（まんじのまえ）という女を助けます。彼は万字前を娶り、関東へと赴き、遠州小夜の中山で足を止めました。昼間は身を隠し、夜は街道にて旅人を斬り殺し、旅費を奪い取り、死骸を谷底に突き落とす追いはぎを業とします。

業右衛門の後妻たがね

万字前には夫がいました。20年近く前のこと、日野三位良政（ひののさんみよしまさ）が、命により蛇身鳥（じゃしんちょう）を退治した恩賞として、後醍醐天皇から万字前を賜ったのです。良政には許嫁がおり、その許嫁が、この伝説の主人公月小夜でした。良政のふたりの妻は、互いに正室の座を譲り合っていました。

月小夜は二人の子を授かっても誇ることなく、万字前を姉のように慕いましたが、万字前の内なる嫉妬心は激しいもので、丑時参りや讒言を重ねました。かの蛇身鳥が、かつて処刑された右少辨俊基で、月小夜は父の敵討ちのため良政の命を狙っていると流言し、月小夜とその二人の子の命を落とそうとしたのです。万字前の悪事が明るみとなり、彼女は出奔した折に山賊に襲われ、業右衛門に助けられたのでした。万字前は、当初こそ業右衛門の暴悪を恥じましたが、名を「たがね」と変え、次第に夫を励ますようになりました。

右少辨俊基（日野俊基）

俊基の官位が資料によって異なり、ここでは右少辨です。1世紀以上前に同様の運命にあった先人藤原宗行を思い、菊川の地名にかけて「古もかかるためしをきく河のおなじ流れに身をや沈めん」と歌った詩が、宗行の詩碑と並んで建てられています。彼は、元弘の乱で正慶元年6月3日に処刑されました。

馬琴による『石言遺響』の中で、処刑された俊基が遺恨やまず畜生道に生を受け、蛇身鳥となり、三熱の苦しみ絶えず、罪なき人肉を食していたのは、この伝説内では事実です。俊基の霊は娘の月小夜に現れ、自ら良政に射殺されることを伝えました。しかし俊基は、良政と夫婦むつまじく暮らし、仇を討とうなどと思わず父母の菩提のため鐘供養をすることなどを説いています。月小夜の仇討ち計画は全くの流言でした。

継母による八五郎虐待

業右衛門とたがねは女兒を授かり、「枝折（しおり）」と名付けました。40歳近くになっ

て初めて得た実子の愛に溺れたたがねは、八五郎を憎むこと甚だしく、全盲にもかかわらず継子を叩き、夫が不在の時には食事さえ与えないほどでした。もとより孝心深い八五郎は、いささかの争いもせず、父にも告げることもありません。業右衛門は妻の継子いじめを知りませんでした。

父を諫め孝に死す決意

15歳となり、「鶴の巣籠」を吹きつつ、動物の親子愛の切なさや養育の慈恩をつらつら思っていた八五郎は、父の悪事を知りながら諫めないことは人の道に背くと考えました。父の愛を知っていたからこそ、自分が犠牲になれば悔い改めると思ったのでしょう。宵より父は不在で吹雪、つまり父が追いはぎに出かけた雪の夜、継母が早めに床についた後、八五郎は父への諫言のために犠牲になろうと、上着を着、蓑笠を被り、杖も持たずに外に出ます。七転八起の艱難に足が傷ついて雪が染まりましたけれども、少年は数十町の坂道を越え、街道にたどり着きました。

八五郎の死

一方業右衛門は旅人を待っていました。一寸先も見えないほど雪が降る夜とはいえ周知の場所です。人の足音を聞きつけた業右衛門は、天の賜物と喜んで弓を引きます。射られた者はたちまち息絶えました。衣服をはぎ取り、旅費を探り、死骸を谷底に蹴落とした後、家路についた業右衛門は、帰宅してやっと灯りの下で、奪った衣類が八五郎のものであることに気づきます。さすがの業右衛門も激しく悔やみ、形見となった尺八を取りだして口に当てました。すると息子の魂が、この尺八に留まっているように思うのでした。

業右衛門再び貪婪の心

業右衛門は二十日ほど蟄居しましたが、妻から何度も罵られたため、尺八を腰に、再び山中に出ました。尺八を吹きながら山路を上ると、松陰で伏しながら苦しんでいる女性があります。清水を掬って口中に注ごうとしたところ、懐胎の婦人で、袋を所持していることに気づきました。二度と殺生はしないと思っていた業右衛門でしたが、そのとき再び彼に貪婪の心が起こります。

小石姫の最期

懐胎の婦人は、月小夜の娘小石姫でした。月小夜は俊基の娘ですから、小石姫はその孫にあたります。小石姫は、業右衛門が奪おうとした守り袋の中身が金ではなく母の形見で

あると、涙ながらに訴えましたが、業右衛門に脇腹を四五寸切られ、倒れました。命の限り助けを求めるもむなしく、声を立てさせまいとする業右衛門に蹴られ、刀で咽喉を刺されてしまいます。こうして小石姫は、17年の人生を閉じました。

小石姫の守り袋の中身

小石姫の守り袋には、金の観音像が入っていました。この観音像は、かつて万字前の流言により斬首されることとなった月小夜の身代わりとなって首を失った像で、良政が月小夜に贈ったものでした。観音像の首は、小石姫の傷口から生まれた女兒の掌で、後に発見されます。

遺体から生まれた嬰兒

小石姫が殺害されるとまもなく鉦鼓の音が聞こえ、ひとりの法師が忽然と現れたため、業右衛門は驚き、立ち去ってしまいました。かの尺八は捨て置かれたままです。小石姫の傷口から生まれた八ヶ月の胎児は、声高く泣きました。法師はしばらく躊躇しましたが、遂に赤子を抱きました。この女兒は、靈僧であるこの法師が、新田村より数町東の街道で飴と餅を売る文平（ぶんぺい）という主人の店で翌日より毎夜買い求めた飴で育ちます。

小石姫の夫春木傳内（はるきでんない）

傳内の元の名は橘主税（たちばなちから）です。兄の橘主計介（たちばなかぞへのすけ）が良政の許嫁月小夜を迎えに来た時、俊基の臣でそれまで月小夜に使えていた春木兵左右衛門爲宗（はるきひょうざえもんためむね）が処刑された俊基への義によって切腹したことに心を打たれ、弟の主税に春木の姓を継がせたのでした。

小石姫と傳内

万字前は月小夜の二人の子、小石姫と香樹丸（こうじゅまる）の命も狙ったのですが、主計介が、当時15歳の弟主税を死んだことにして、月小夜とその二児を託し、逃がします。小石姫は5歳、香樹丸（こうじゅまる、後の政教郷）は3歳でした。4人は小夜の中山を越え、菊川よりはるか西の庄の窪という里に一件の空き家を得ます。

主税は心低くして名を傳内と改め、菊川の宿で働きながら、三人の主君のために生計を立てました。小石姫7歳、香樹丸5歳時に、月小夜が釣鐘建立のため密かに出家した後、傳内はふたりの幼君に仕えたのでした。

清道比丘（せいどうびくに）と法号し、諸国を勧化していた月小夜は、その途上、小夜

中山の家の近くで、我が子を一目見ようと立ち寄ります。10年近い年月を経、小石姫 16 歳、香樹丸 14 歳。名乗り出ることができずにいるところへ、傳内が帰宅し、親子再会を果たしました。長旅でやつれた清道比丘は、傳内の看病を受け、釣鐘建立を託し、遺言により傳内と小石姫が枕元で杯を交わした三日後に 33 歳で亡くなりました。香樹丸は遺言により、父良政の元へ旅立ちます。

小石姫の遺体と尺八

小石姫が横死する頃まで、夫の傳内は諸国を勧化し、釣鐘建立のための施しを乞っていました。月小夜が、父母の供養に、小夜中山の観音寺に釣鐘を建立するため、出家し、10 年間難行苦行をしながらも叶わぬうちに逝ってしまったため、遺言により、その遺志を果たそうとしたのでした。小石姫と傳内の結婚も、月小夜の遺言によります。

夜を侵して道を急ぎ、日坂まで来た時に、傳内は沓掛の松原で女性が斬り殺されたという立ち話を耳にします。胸騒ぎがして現地に急ぐと、松の木陰に、妻の死骸がありました。そばには、血まみれの尺八が落ちています。この笛すなわち尺八こそ仇人の証拠となるべきものと思い、尺八を懷に収めました。

小石姫の埋葬と夜泣き石

小石姫の死骸の重さは磐石のようで、数十人力を合わせても一足も動きませんでした。それで殺害された場所に葬ろうと傳内自ら穴を掘ったところ、土中から壺が現れます。蓋を開けてみると、驚くほど多くの砂金が入っていました。月小夜の釣鐘造立料を賜い、二世に渡る宿願成就なるとは、ひとえに小石姫の大功と嘆賞し、亡骸を埋め、一塊の圓石を立て、墓の印としました。その石こそ、歌川広重「東海道五十三次」(1833/34) に描かれ、明治天皇が東京行幸する以前まで踏掛（沓掛）の街道にあった夜泣き石でした。この浮世絵は、拙読み物「マーラーの『嘆きの歌』と日本の民話」22 ページに載せています。



傳内釣鐘建立を成し遂げ、仇討ちに出る

妻を葬り傳内が帰ると、霊壇に空紙の掛け物があり、翌朝その掛け物に観世音の御影が忽然と描かれていました。しかもこの尊像は左右の御手に一人の赤子を抱いています。驚いた傳内ですが、妻の仇人は皆目見当がつかず、証拠となる尺八も尋常のもの。仇討ちに先んじ、鋳物師数十人を集い、小石姫三七の忌日に当たる3月17日を鐘鋳の本日と決めました。自ら万事指図し、できあがった黄金十分の名鐘は、鐘楼の上に引き上げられましたが、思うところがあり、鐘をつくのは控えました。次の日、掛け物の観世が赤子と共に去り、見えなくなったため、傳内はいよいよそれが霊物であることを悟り、八五郎の尺八を手し、尺八に相応しい虚無僧の姿で仇討ちに出ます。

八五郎の尺八傳内を救う

傳内が仇討ちのため、小夜の中山を出、諸州を遍歴し、すでに1年あまりの月日が経ちました。近江路の宿に宿泊したところ、主人は不在で、奉公人と3、4歳の女兒がいました。その子が厠へ行こうとすると、女兒は土中に落ち、数多の剣に全身貫かれ、朱に染まって死んでしまいます。旅人を狙って仕掛けた落とし穴に、愛児が犠牲となったのでした。帰った主人は、万字前によく似た女。我が子が殺されたと疑い、憤勇して猛然と傳内に打ち掛かってきました。傳内は八五郎の尺八で受け止めます。

たがね（万字前）自害

傳内とたがね（万字前）は互いを名乗り合います（業右衛門との再婚までは万字前と記します）。万字前は、監飽三郎勝重の娘で、丙午年、丑の刻の日食の日に生まれたため、人から忌み嫌われながらも父母に捨てられることなく育ちました。後醍醐天皇が北条高時を滅ぼそうとした時、勝重は俊基から密かに招かれ密事を告げられたのですが、平家譜代の武士であることを理由に受け入れませんでした。それで俊基は、はかりごとがもれることとおそれ、勝重を殺してしまったということです。領地も没収され、母と共に江州坂本の土民の家に寓居し、程なくして母も失い、艱難を経た万字前は、前述したとおり良政による怪鳥退治の報償として宮中に召されましたが、間もなくして父の仇の娘である月小夜と妻の座を共にすることとなりました。それで月小夜とその子らの命を狙ったのでした。

傳内は、たがねの話により、山賊となった業右衛門と再婚し、小夜の中山で、娘枝折に良い着物を着せたいため、悪事を勧め、罪に罪を重ね、遂に継子八五郎が射殺されたことを知ります。また業右衛門がその春、小夜の中山を逃れ去ったことにより、小石姫もその犠牲になったことを悟ります。生活に困ったたがねは、枝折を連れ、近江の柏原にやってきたということです。「近江や柏原が露と消えたとしてもなお消えやらぬ五逆十悪の名こそ悔しけれ」という声も絶え絶えに、たがねは俄然として息絶えました。自害したのです。かつて小石姫の命を狙った者ではありますが、元の主君良政の妻。傳内はこの家を焼き払い、たがねと枝折の死骸を火葬にしました。

傳内と業右衛門の決闘

傳内は摂津国、宿川原というところにたどり着きました。数多の梵論（ぼろ）が念仏尺八を合わせ吹き、傳内も1曲吹いて退散しました。河原伝いに2、3町来たその時、一人の梵論が傳内の袖を引き、その尺八を熱望します。その尺八は見覚えあるものという梵論を、傳内は業右衛門と推し、貴坊の秘蔵と交易すべしと語りました。すると梵論はしばらく沈吟し、懷中より錦の守り袋を渡します。傳内はその守り袋を証拠として素性を名乗り、たがねと枝折の死を伝え、勝負を決すよう、申し出ました。

八五郎の尺八再び傳内を守る

八五郎の形見の笛を求めながら、再び妻子を失ったことを知った業右衛門は、傳内の決闘申し出を受け、互いに声を合わせ、天蓋（虚無僧の被り物）を投げ捨てます。業右衛門の一刀を、傳内は、かつて万字前に襲われた時のように尺八で受け止めました。業右衛門

が苛立ち、太刀で笛を切り折ったところ、一道の白気が切り口より立ち上りました。なおも続く業右衛門の太刀を傳内がかわし、一声喚で業右衛門にかかったところ、業右衛門の体は真っ二つに分かれ、左右へはたと倒れたのでした。八五郎の尺八が傳内を守り、傳内の仇討ちを助けるとともに、父への諫言を果たしたように思えます。八五郎の死とともに、読み応えのあるところです。

傳内父娘のその後

傳内は仇人の首を斬り、これを携え、ただちに吉野の皇居に向かい、兄主計介と良政に清道尼と小石姫のことを伝えました。香樹丸は父良政に10余年ぶりに再会し、政教（まさのり）との名を賜ります。傳内はそれから小夜の中山へまかり、小石姫の墓に仇人の首級を手向け、鐘供養を遂げた後、山城介（やましろのすけ）の名を任ぜられました。今なお、小石姫の遺児である娘の存在は全く知りません。

小石姫の遺児は、生後20日ばかりの頃、僧を怪しんで後をつけてきた飴屋の文平に拾われました。その時赤子は、小石姫の着物で包まれていました。文平が金銭的な問題で寺に助けを求めた後、この子は玉衣（たまぎぬ）という女性に託されます。玉衣は以前から傳内に心を寄せ、結婚を望んでいた女性でした。傳内から、妻の忌が明ければ話に来ると言われていたにもかかわらず、傳内が約束を果たさずに妻の仇討ちに出たため、病み、観音寺に走り、祈念したところ、この子を育てれば、子も成長し玉衣の宿願も成就すると言われていました。玉衣は喜んで孤児を引き取り、乳母を雇い両親と共に育てます。今は政教となった父は、遺された小石姫の破衣で、遺児が我が子であることを悟りました。小石姫は妻とはいえ元主君。玉衣の子育てへの謝意と、小石姫への忠から、玉衣を正室ではなく側室に迎えました。女兒は成長後、叔父で三位の中将に任ぜられた政教卿の養女として准三宮親房卿（じゅんさんぐうちかふさきょう）の公達に嫁いだそうです。

その後良政は吉野の奥に隠居し、百余歳で大往生を遂げました。橘春木兄弟は、官位昇進した政教を臣としてよく補佐し、その忠臣孝子は世にもまれなるほどだったということです。

小夜の中山には、馬琴によって同文化元年に書かれたという同名の「石言遺響」によると記された別の伝説の案内板があります。伝説や昔話が、さまざまな形で異なって伝わるのはよくあることですが、作品名や年まで一致するとなると気になるところです。

「石言遺響」では、殺害された少年に関わる楽器が、復讐だけではなく親への諫言も果

たし、忠や孝という武士道に通じる尊い精神を貫く役割を演じています。伝説であるとともに、馬琴による高尚な文学作品ともいえる名作でしょう。こうした昔話や伝説がなぜ『嘆きの歌』と関連づけられるかといいますと、それはブルーノ・ワルターのことばで説明できそうな気がします。ワルターによれば、マーラーの主題設定の重要部分には民謡に由来し、作品自体民謡であり、『嘆きの歌』のテキストも、「民衆的詩情の思考や感情の領域から出たもので」す。歌う骨についてのグリム童話によって「詩的基盤」が形作られ、それにより「音楽は靈感を与えられ、徹頭徹尾独創的で、劇的感情と精神的人間性に満ちている」のです。